

【中学校実践事例】

1 研究テーマ 「中世の日本～『紡がれる』生徒の問い、『つながる』歴史の流れ～」

2 単 元 名 第1学年 歴史的分野「中世の日本」

3 本単元で目指す生徒の姿

- 中世の日本の歴史の大きな流れを、社会の移り変わりに着目し、時代の特色を踏まえて理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けている。
- 中世の日本に関わる事象の意味や意義、政治の展開、産業の発達、社会の様子や文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連などに着目して多面的・多角的に考察し、その結果を言葉や図などで表したり、それらを基に意見交換したりしている。
- 中世の日本に関わる諸事象について、そこで見られる課題を主体的に追求、解決しようとしている。

4 教材開発・単元構成の工夫

(1) 小学校・中学校の系統性を踏まえ、中項目を核とした単元構成の工夫

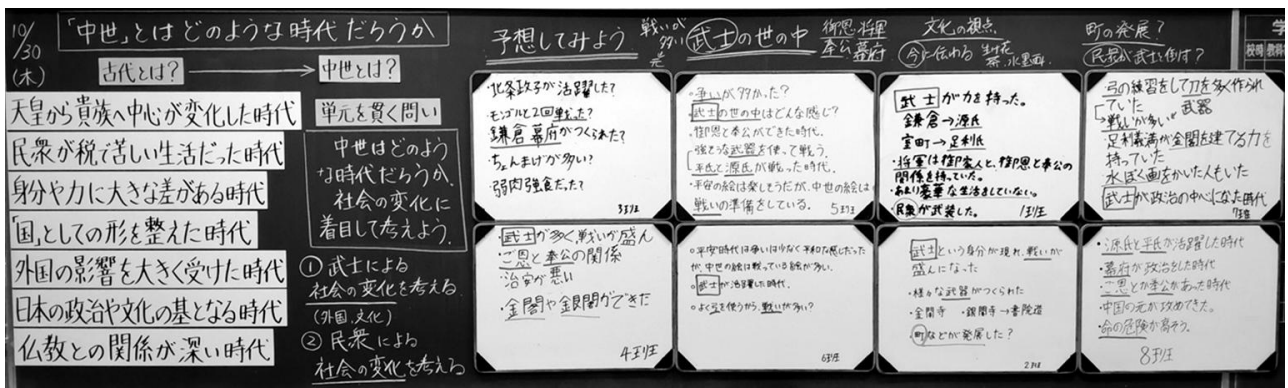
生徒は小学校において、鎌倉時代については「源平の戦い」「鎌倉幕府の始まり」「元との戦い」を手掛かりに武士による政治が始まったことを、室町時代については代表的な建築物や絵画を手掛かりに室町文化が生まれたことを学んでいる。しかし、小学校での歴史学習は、通史ではなく、各時代の典型的な歴史上の事象や関連する人物、代表的な文化遺産を取り上げて学習する形式であるため、生徒は、個別の歴史的事象の理解に留まっている。

中学校では、「我が国の歴史の大きな流れ」を「各時代の特色を踏まえて理解する」とことと「歴史に関わる事象の意味や意義」、「特色」や「相互の関連」などを多面的・多角的に考察することが学習指導要領で示されている。しかし、「歴史の大きな流れ」を扱うということは、歴史的事象を個別・詳細に扱うことではない。したがって、生徒が各時代の特色と歴史の大きな流れを、多面的・多角的に考察し、表現することができるように、単元の展開過程を体系的に構成することが必要である。そこで、本実践では、内容のまとまりである中項目「B(2)中世の日本」を一つの大単元として扱い、「中世の日本」全体の学習の見通しを立てる大単元の導入に続き、学習指導要領のア(ア)から(ウ)の事項を「武家政治」と「民衆の成長」の二つの小単元に分けて学習し、さらにイに対応した中項目全体のまとめを行うように構成した。

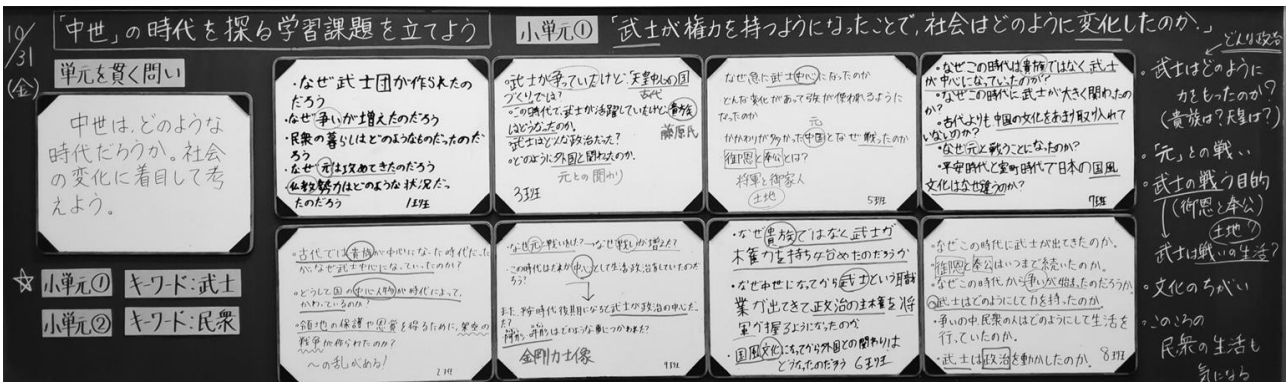
(2) 生徒の問題意識のつながりを生かした問題解決的な学習過程の工夫

生徒が中世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現するためには、学習指導要領の項目や事項に示されたねらいを踏まえて、歴史的事象を結ぶ問いを構成していくことが必要である。しかし、問いは教師が全て一方的に提示するものではなく、生徒自身が見いだした問いであることが重要である。なぜなら、問いは、自分ごととして追求活動を行う出発点であると同時に、社会的事象のより深い考察や構想へ導くものだからである。そこで本実践では、中世の特色を表す資料や社会的事象から生徒が様々な問いを持ち、他者と共有し、新たな問いを見だし、考察を繰り返して問いを深化させていく（＝「問い」を紡ぐ）問題解決的な学習を通して、生徒が中世の日本に対する思考を広げ深めていくことができるようにした。

まず、つかむ場面（大単元の導入）では、「年中行事絵巻」と「男衾三郎絵巻」の比較から、時代の変化に気付かせ、中項目を貫く問いである「中世は、どのような時代だろうか。社会の変化に着目して考えよう。」を提示する。見通す場面では、小学校での学習を基に、問いに対する予想を行う（資料1）。その後、予想を学級全体で分類し、生徒がキーワードになるのではないかと考えた「武士」と「民衆」から「武士が権力を持つようになったことで、社会はどのように変化したのか」「室町時代において、民衆の生活や行動はどのように変化したのか」の二つの小単元の問いを学級で設定する。さらに、小単元の問いを解決していくためにどのようなことを追求していけばよいのか考え、学級で共有して分類し、小さな問いを設定する（資料2）。そして、調べる・深める場面において、この小さな問いを個や小集団で追求する。小さな問いをつくる、追求するという活動は二つの小単元で繰り返し行う。生徒は、他者と問いを共有しながら、学習問題を粘り強く追求して考察を重ねることで、中項目を貫く問いにつながる歴史的事象を結び付けながら、それらを概念的な知識として獲得し、中世の日本に対する理解を広げ深めていくことができると考える。



資料1 予想から学習計画の立案の場面での板書



資料2 小単元①を追求するための問いを共有する場面での板書

(3) 中項目同士のつながりから生徒に問題解決の見通しを持たせる工夫

学習指導要領の歴史的分野では、その目標の(1)において、中学校歴史的分野の学習の中心が「歴史の大きな流れ」を、「各時代の特色を踏まえて理解すること」と示されており、学習する時代によって違いはない。したがって、古代、中世、近世、…と続く学習を一つ一つ分断させるのではなく、それぞれ中項目を貫く問いを「〇〇はどのような時代だろうか。社会の変化に着目して考えよう。」として問題解決的な学習過程を繰り返すことで、生徒の問題意識が中項目で分けられた時代を超えてつながり、前の時代の学習を活かしたり、次の時代の学習への見通しを持ったりすることができ、より深い学びになると考える。

単元の流れ (全 18 時間)

(●…「学習改善につなげる評価」、○…「評定に用いる評価」)

過程	具体的な学習の流れと内容	評価規準 (方法) 【観点】
学習問題 教師の問い 掛け 追求内容 予想される 子どもの反応 まとめ 本質の把握 資料 教師の働きかけ	「古代の日本」の学習を振り返ろう。 - 古代は、権力者が変化した時代だ。天皇から貴族の藤原氏に権力者が変わった。 - 古代は、政治や文化などで、中国との関わりが深い時代だ。 年中行事絵巻 男衾三郎絵巻 【中項目を貫く問い】 中世は、どのような時代だろうか。社会の変化に着目して考えよう。 小学校での学習などを踏まえて、「中項目を貫く問い」に対する今の考えを書こう。 - 中世は、武士が権力を持った時代だと思う。なぜなら、幕府が出来て、貴族よりも力を持って政治を行ったから。 - 中世は、今につながる文化が生まれた時代だと思う。今の時代に残っているものが多いから。 平治の乱物語絵巻 鎌倉・室町幕府の仕組み 武士の館 (一遍上人絵伝) 蒙古襲来絵詞 洛中洛外図屏風 一揆の様子	★ 学習支援アプリを活用し、「授業シート」で課題を追求し、「考察シート」にまとめ、評価に生かす。 ● 小学校での学習などを基に、中項目を貫く問いに対する学習の見通しを立て、学習を通して明らかにしようとしている。 (授業シート) 【態】

過 程	具体的な学習の流れと内容	評価規準 (方法)【観点】
	学習問題 教師の問い掛け 追求内容 予想される 生徒の反応 まとめ 本質的把握 資料 教師の働きかけ	
学習計画の立案(1)	「中項目を貫く問い」を解決するために、何が分かればよいか、どのようなことを調べればよいかなど、学習の計画を立て、見通しを持とう。 ・この時代のキーワードは「武士」だと思う。まずは、武士が権力を持って、社会がどのように変わったのかについて分かれば、中世の特色が見えてくると思う。 ・この時代の「民衆」の様子が古代と異なっているので、その理由も調べたい。 ・「古代」の学習のように、政治・外国・文化の関連性を見付けければ、中世の特色も見えるのではないかな。	
個や小集団での追求Ⅰ(6)	【小単元1】武士が権力を持つようになったことで、社会はどのように変化したのか。 社会の変化に着目して、様々な視点から問いをつくろう。 ・なぜ、武士は「土地」にこだわっていたのだろうか。 ・武士が政治を行うようになって、文化はどのように変化したのか。 ・元寇は鎌倉幕府にどのような影響を与えたのだろうか。 【1次】(例) 武士は、どのように権力を強めていったのか。 【2次】(例) 武士は、なぜ、土地を大事にするのか。 春日権現験記絵 日本各地の争乱の地図 鎌倉幕府の仕組み 御成敗式目 平治物語絵巻 源平争乱の地図 承久の乱後の地頭の配置 【3次】(例) 鎌倉時代の武士は、どのような生活をしていたのか。 【4次】(例) 元寇は、鎌倉幕府にどのような影響を与えたのか。 男衾三郎絵巻 モンゴル帝国地図 蒙古襲来絵詞 永仁の徳政令 【5次】(例) 社会の変化に伴い、文化はどのように変化したのか。 金剛力士像 平家物語 鎌倉新仏教の教え 【6次】(例) 鎌倉幕府滅亡後、政治の中心はどのように変化したのか。 二条河原落書 花の御所 倭寇図鑑	● 資料から学習上の課題につながる情報を適切に読み取っている。 (授業シート)【知・技】 ● 当時の政治や社会の動向に着目して考察し、相互に結果を表現している。 (考察シート)【思】 ● 武家政治の展開について、ユーラシア大陸の動向に着目して考察し、相互に結果を表現している。 (考察シート)【思】
学級集団での練り合い・高め合いⅠ(0.7)	各次で学習した事柄を踏まえて、小単元1「武士が権力を持つようになったことで、社会はどのように変化したのか」について考察し、考察シートにまとめよう。	○ 「武士の支配が広がることによって社会が変化したこと」について説明している。 (考察シート)【知・技】
本質的把握Ⅰ(0.3)	武士が武力を背景に台頭し、朝廷の争いに協力した平氏や源氏が政治の実権を握った。源氏は鎌倉幕府を開き、御恩と奉公による将軍と御家人との土地による主従関係を基にした支配体制を築いた。これにより、実力本位のたての関係の強い社会が構築され、武士は領地を守るために武芸に励んだ。また、政治の中心が貴族から武士へ移ったことで、武士たちが好む力強い文化が広がるとともに、社会の不安定さを背景とした新しい仏教も広がった。元寇後は、御家人の経済的困窮から幕府との関係が崩れ、鎌倉幕府は滅亡した。しかし、実力本位の社会は受け継がれ、室町幕府が成立し、貿易で経済力を高めながら、有力な武士(守護大名)による政治が行われた。	○ 武士の政治への進出と展開に着目して、小単元の学習課題について考察し、結果を表現している。 (考察シート)【思】
振り返りⅠ(0.5)	中項目を貫く問いの課題解決に向けて、自分の学びを振り返ろう。 ・「古代」と比較して、武士による幕府という政治の仕組みが誕生したことや土地での主従関係(たての関係)は、中世の特色になりそうだな。 ・班で話し合うことで、いろいろな考え方を知ることができて良かった。 ・鎌倉時代の民衆は、どうやって、力を付けている武士に対抗できるようになったのだろうか。調べてみたいな。	● 自己の学習について振り返り、調整しようとしている。(考察シート)【態】
新たな学習課題の設定(0.5)	【小単元2】室町時代において、民衆の生活や行動はどのように変化したのか。 職人尽歌合 正長の土一揆碑文 洛中洛外図屏風 社会の変化について、人々の関係性に着目して、「問い」をつくろう。 ・なぜ、室町時代に多くの職業が誕生したのだろうか。 ・正長の土一揆は、どのような人がどのような理由で起こしたのだろうか。 ・戦いが続いたのに、どのようにしてにぎわいのある都市になったのだろうか。	● 資料から学習上の課題につながる情報を適切に読み取っている。 (授業シート)【知・技】

過 程		具体的な学習の流れと内容				評価規準（方法）【観点】
学習問題	教師の問い 掛け 追求内容	予想される 子どもの反応	まとめ 本質的把握	資料 教師の働きかけ		
個や小集団での 追求Ⅱ(5)	【1次】(例) なぜ、室町時代に多くの職業が誕生したのだろうか。		【2次】(例) 日本は、東アジア諸国とどのような結び付きがあったのか。		● 産業の発達が社会に与えた影響に着目して考察し、相互に結果を表現している。 (考察シート)【思】 ● 東アジアとの交流に着目して考察し、相互に結果を表現している。 (考察シート)【思】 ○ 「民衆の成長を背景とした社会や新たな文化が生まれたこと」について説明している。 (考察シート)【知・技】 ○ 産業の発達や自治のしくみに着目して、小単元の学習課題について考察し、結果を表現している。 (考察シート)【思】 ○ 中世の社会の特色について、政治、産業、社会、文化など権力者層の移り変わりによる共通点や相違点に着目し、比較や関連付けを通して多面的・多角的に考察し、獲得した知識を活用して学習を振り返りながら、文章や図などでまとめている。 (考察シート)【思】 ○ 「中世の日本」について考察し、次の単元「近世の日本」の学習につながる「着目する視点」を考え、表現している。(考察シート)【思】 ○ 中項目における自身の学習の経緯について振り返り、学習の方法や留意点について自身の学びを確認、調整しようとしているとともに、推移や変化、影響などに着目して、中世の社会の変化の中から、近世につながる動きをあげるなど、次の学習へのつながりを見いだそうとしている。 (考察シート)【態】	
	月次風俗図屏風 職人尽歌合		結桶・結樽 馬借・車借 明銭 倭寇図巻 室町時代の交易路 首里城正殿			
	【3次】(例) 結び付きを強めた民衆は、どのような考えで、どのような行動を起こしたのか。		【4次】(例) 応仁の乱後、社会はどのように変化したのか。			
	祇園祭 村のおきて		正長の土一揆碑文 加賀の一向一揆の様子 真如堂縁起絵巻 主な戦国大名 分国法			
	【5次】(例) 室町時代には、どのような特色を持った文化が栄えたのか。					
学級集団での練り合い・高め合いⅡ(0.7)	金閣・銀閣 能・狂言 御伽草子					
	各次で学習した事柄を踏まえて、小単元2「室町時代において、民衆の生活や行動はどのように変化したのか」について考察し、考察シートにまとめよう。					
本質的把握Ⅱ (0.3)	生産力や技術力が向上したことで、商品が多く売買されて、貨幣経済が広がるとともに、それらを運ぶための交通網が発達し、産業が発達した。また、琉球王国やアイヌと交易をする商人も現れた。このように力を付けた民衆は、自分たちのことは、自分たちで解決するという考え方で一揆などを起こすようになりつながりを強めていった。応仁の乱後は、戦国大名や下剋上など社会全体が大きく変化していった。					
中項目全体の まとめ(1)	【中項目全体のまとめ】 中世はどのような時代だろうか。中世の日本の学習を踏まえ、時代の移り変わりによる社会の変化に着目して、中世の社会の特色について自分の考えをまとめよう。					
振り返り(1)	・中世は武士と民衆が力を持った時代だ。なぜなら、武士は土地を基にした主従関係を強めて幕府を開いて政治を行い、民衆は、産業や経済の発達で力を付けて、自分たちのことは自分たちで解決するという考えのもと自治を行うようになったからだ。 ・中世は、武力・実力が強さとされた社会だ。貴族の位や役職とは違い、武力や経済力で強い人が決まっていき、政治や行動を起こしていく時代だと感じたからだ。					
	学習前後の自分の考えを比べ、加わった点や新たに気付いた点などを振り返ろう。					
	・最初は、武士のことしか考えることができていなかったが、学習を進めると、民衆の立場や文化など、多くのことがお互いに影響し合っていることに気付いた。 ・小学校では、元寇や書院造についてなど、ある程度しか知らなかったが、学習を終えて、歴史の深さに気付いた。 ・予想を立ててから課題を考えると、自分の予想が裏切られるので、興味を持って学習に取り組むことができた。					
	これまでの学習から、次の単元「近世の日本」では、どのような点に着目すればよいだろうか。					
	・政治の中心となる権力者が変わると、時代の特色が変わることに気付いたので、近世の「権力者」に注目したい。 ・これまでも日本と外国との関係は深かったので、「外国との関わり」の視点は大事になると思う。友達と一緒に調べていきたい。 ・中世で力を付けた「民衆」が近世でも活躍するのではないか。 ・「近世の日本」も、出されたキーワードに着目して学習課題を設定し、計画を立てて追求していこう。					

5 学習指導方法の工夫・改善

社会の在り方や自らの生き方を追求しようとする資質・能力は、生徒が問いを持ち、主体性を発揮しながら調べたり考えたりして適切に表現する問題解決的な学習過程において育成される。そこで、本実践では、問題解決的な学習の鍵となる社会的な見方・考え方を働かせる問いの創出と、まとめる場面における教師のコーディネートに重点を当てて学習指導方法の工夫・改善を行った。

(1) 歴史的な見方・考え方を働かせる問いを創出するための工夫

生徒が中世の日本に対する思考を深めていくためには、生徒自身の問いを紡ぎながらも、単元のねらいに迫ることができ、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせる問いを設定することが必要である。そこで、本実践では、小単元の問いを解決していくための小さな問いを設定する場面において、以下の二つの工夫を行った。

一つ目は、「古代の日本」の学習で生徒が獲得した歴史的な見方・考え方に沿った視点である政治の展開、外国との関わり、文化の特色、民衆の生活に基づいた問いを生徒から引き出すために、これらの視点に沿った中世の日本に関わる複数の資料を、つかむ場面や見通す場面で提示したことである。これにより、生徒は資料を活用して、これまでの学習で着目した視点を振り返りながら、新たに中世の日本の小単元の解決につながりそうな具体的な問いを設定することができた。

二つ目は、個人で問いを考えた後に、小グループで問いを共有し、問いの妥当性について話し合う時間を設定したことである。問いの妥当性を考える基準として、その問いを追求することで「時代の変化が分かるか（推移）・時代の特色が分かるか（比較）」を提示した。これに、「古代の日本」の学習で生徒が獲得した政治の展開、外国との関わりなどの歴史的な見方・考え方に沿った視点の「それぞれの結び付きや影響が分かるか（相互の関連）」を加えて考えさせた。これにより、問いが歴史的な見方・考え方を働かせた、考察に向かう問いになったと考える（資料3）。さらに、この話し合いの中で生徒は、自分の考えている問いが、小単元の問いの解決に留まらず、中項目を貫く問いを考えていく上でも妥当なものかどうかについても意見する姿が見られた。また、問いを考えることが苦手な生徒も、問いを共有し、問いの調整を行うことで、歴史的な見方・考え方の定着が進み、その後の主体的な追求活動につながったと考える。

小グループで話し合う前の問い		小グループで話し合った後の問い
・源頼朝は、どこに幕府を作ったのだろうか。 ・鎌倉時代には、誰が活躍したのだろうか。 ・元寇で、元軍はどのような武器を使ったのだろうか。 ・「御恩と奉公」とはどのような仕組みだろうか。 ・金閣には、どれくらいの金が使われているのだろうか。		・武士が中心の時代になって、政治や文化はどのように変化したのだろうか。 ・古代で活躍したのは天皇や貴族だったのに、なぜ、中世では武士が力を持つようになったのだろうか。 ・元が攻めてきたことで、日本にはどのような影響があったのだろうか。 ・なぜ、武士は「御恩と奉公」のように土地を大事にしたのだろうか。 ・古代と比べて、仏教などの宗教は、この時代にどのような影響を与えたのだろうか。

資料3 小単元①における話し合い前後の生徒の問いの変化

(2) まとめる場面における教師のコーディネート工夫

まとめる場面では、予想したことや追求したことを想起させ、生徒が歴史的事象を結び付けながら、学習問題に対する個なりのまとめをする活動を行う。そこでは、個々のまとめを共有し、ねらいとする概念的な知識の獲得につながるような教師のコーディネートが必要となる。特に、本実践は学習する単元が大きいいため、まとめる場面（大単元の終末）において、中世の日本の大観が、時代の一部分を切り取ったまとめや鎌倉時代と室町時代に起きた歴史的事象の羅列になることが考えられた。したがって、日本の中世の大観が、社会的な見方・考え方を働かせ、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現したものとなるように以下の三つの工夫を行った。

一つ目は、生徒がまとめる形を「中世は〇〇な時代である。なぜなら、△△だからである。」という定型文にしたことである。一文目を中世の大観を表す形にし、二文目で、なぜそのように考えたのかを歴史的事象を基に書くようにした。この定型文は「古代の日本」の学習でも活用している。「古代の日本」のまとめる活動において、時代の特色を表すキーワードを生徒に選択させて時代の大観を行ったところ、歴史的事象の羅列に終始する生徒が一定数出た（資料4）。歴史的事象を時系列的に並べて書くだけでは、時代の特色は見え

にくく、時代を大きく捉えることも不十分である。それを防ぐために、一文目に時代の大観を書く形の定型文を設定した（資料5）。さらに、この定型文を古代の学習から中世の学習へと継続させたことが学びの深化にもつながった。本実践のまとめる活動において、生徒が中世の日本の特色を考える足掛かりの一つとなったのが古代との比較である。生徒は学習した古代の特色と中世の歴史的事象を比較しながら、時期、推移などに着目して、類似や差異などを明確にし、事象同士を関連付けることで中世の日本の特色を見いだそうとしていた。その際、古代の日本の特色が同じ定型文でまとめられていたため比較が容易であった。次の中項目「近世の日本」の学習においても、同じ定型文とすることで、学びが一層深まると考える。

【「古代の日本」における羅列に終始した生徒のまとめ】

・古代は、聖徳太子が摂政として力を持ち、十七条の憲法や冠位十二階を作って天皇中心の世の中を作ろうとした時代である。その後、蘇我氏が力を持ったため、中大兄皇子と中臣鎌足が協力して天皇中心の世の中にした。そして、奈良や京都に都が造られ、大仏などがつくられた。仏教文化も広がった。その後、藤原道長が摂関政治を行って貴族が天皇を超える権力を持つようになった。また、最初は遣隋使や遣唐使が中国に行っていたが、遣唐使の廃止の意見が出てきて、遣唐使が廃止された。それによって、仮名文字などの国風文化が栄えた。

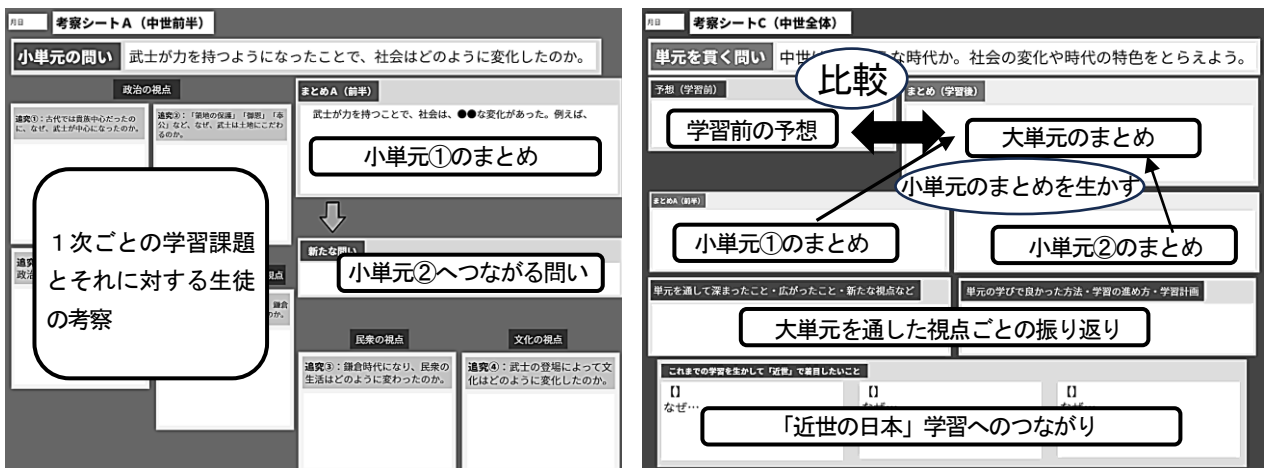
【「中世の日本」におけるまとめ（一文目）】

- ・武士が力を持ち、さらに民衆も力を持ち始めた時代である。
- ・武士が中心となった時代である。
- ・強さの基準が、武力や実力があるかどうかに変化した時代である。
- ・武士や民衆がそれぞれの立場で、社会を支えるようになった時代である。
- ・人と人のつながりが強くなった時代である。
- ・主従関係から、よこのつながりもできていった時代である。
- ・いろいろな立場の人が外国と関わった時代である。

資料4 まとめの実際（生徒のワークシートより）

二つ目は、生徒に中項目を貫く問いを常に意識させるために、毎時間、黒板に中項目を貫く問いを書いたり、単元計画を模造紙に書いて掲示したりしたことである。毎時間の追求の積み重ねのゴールを意識させることで、何のために今日の課題を追求しているのかを明らかにさせた。さらには、小単元のまとめの時間などの機会を捉えて、教師が生徒に自分の書いている内容が中項目を貫く問いの解決につながるものか、中世の日本の大観につながるものかどうか問い掛けることで、時代の一部分を見るのではなく、広い視野で時代を捉えさせるようにした。

三つ目は、大きな単元の学びを効率よく振り返るために、学びを蓄積できる学習シートを活用したことである（資料5）。生徒は、学習シートを参考に、これまでの学びを自分のタイミングで常に確認しながら、中世全体の大観につながるキーワードを取捨選択しまとめていくことができた。また、単元を貫く問いの解決に向けた意見交換・情報共有を円滑に行うことができ、そこから生徒は、考え、表現するよさや伝え合うよさを感じ、より広くより深く考え伝え合う姿につながったと考える。



資料5 各単元のまとめで使用した考察シート

6 評価の工夫

主体性を発揮しながら学び続け、本質的把握に向かう生徒を育成するためには、生徒自身の学び方や社会的現象に対する思考の広がりや深まりを見取って指導や評価に生かすことが必要である。そのためには、評価場面を精選して単元の目標や学習のねらいに即した具体的な評価規準（基準）を作成したり、評価方法を工夫したりして、効果的・効率的に評価することが大切である。そこで、本実践では、ICTを活用しながら、視点を明確にした振り返りとキーワードを想定した明確な基準を設定した評価を行った。

(1) 主体的な学びを促す振り返りの視点の明確化

単元を通して生徒自身が自己の学びを自覚し、学びの質を高めていくことができるように、小単元末、大単元末など振り返りの場面を複数回設定し、ICTを活用しながら自己評価、相互評価を行い、主体的な学びを促す評価の工夫を行った。

それぞれの振り返りの場面では、「学んだことの振り返り」と「学び方の振り返り」の二つの視点から振り返りを行った。学んだことの振り返りの場面では、中項目を貫く問いに対する学習前の予想と学習を終えた後の自分の考えを比較させ、「学習の深まり」「学習の広がり」「新たに獲得した視点」に着目しながら振り返りを行った。また、学び方の振り返りの場面では、「学習計画の立案」「ICTの活用」「小集団活動」などの場面を想起させながら、「中項目を貫く問いの解決に向けてのプロセスはどうだったか」を振り返った。どちらの振り返りの場面においても生徒自身で振り返ったり他者と相互評価をしたりした（資料6）。単元を通して、視点を明確にした振り返りを重ねていくことで、学習問題に対する自分なりの答えが予想した時から変容・進化・深化していることに気付いたり、自分の学び方の良さや価値に気付いたりすることができた。それが、自分の成長への実感や学びの価値の自覚、学んだ自分への自信につながったと考える。

さらに、振り返った内容は学習アプリに入力させた。本実践では、授業資料からワークシート、振り返りシートの全てをタブレット端末に蓄積していった。そのため、学習の全ての足跡が集約され、生徒がこれまでの自分の学びを振り返ったり、他者と相互評価したりすることが容易にできるようになった。

学んだことの振り返り	学び方の振り返り
・最初の予想の内容が浅い。今回の学習で、歴史の大きな流れや深さを知ることができた。 ・室町時代について、文化だけではなく、政治や社会の様子についても知ることができた。 ・最初は、武士のとしか考えることができていなかったが、学習を進めると、民衆の立場や文化など、多くのことがお互いに影響し合っていることに気付いた。 ・権力者が変わると社会の仕組みや価値観、文化が変化することに気付いた。 ・新しく「産業」や「民衆」という視点で歴史を見ることができるようになった。	・予想を立ててから課題を考えると、自分の予想と違うことに気付き、考えが深まるので、興味を持って学習に取り組むことができて良かった。 ・長い時代の単元だったので、小単元を作り2つに分けたことで、しっかりと問いを立てて考えていくことができた。 ・友達と意見交換することは、いろいろな視点で考えることができるので大事だ。次の「近世の日本」の学習でも、積極的に話し合いを行いたい。 ・この学びを生かして、「近世の日本」でも、みんなで考えた視点に着目しながら、自分なりに学習問題を設定し、計画を立てて追求していきたい。

資料6 大単元の生徒の振り返り

(2) 効果的・効率的に生徒の記述を見取るためのキーワードの設定

評価を効果的・効率的に行うためには、確かな社会認識を得た生徒から出てくる、「価値やよさを判断した言葉」や「意味や意義を考えた言葉」などのキーワードを想定して、教師が明確な基準を定めておく必要がある。本実践における「価値やよさを判断した言葉」や「意味や意義を考えた言葉」とは、中世の社会の特色について、時代の権力者層の移り変わりによる共通点や相違点から述べられていたり、政治、産業、社会、文化、外国との関係などを関連付けながら多面的・多角的に述べられたりしたものであり、生徒のまとめの定型文の一文目に表現されているものである。生徒は、日本の中世について大きな枠組みで時代を捉え、政治の展開、外国との関係、産業の発達など比較したり、関連付けたりしながら自分の言葉で表現する。そこで、学習指導要領のアの「知識及び技能」に関する（ア）から（ウ）までの事項と、イの「思考力、判断力、表現力等」に関する項目に基づいて、「武士の政治への進出と展開」（政治の展開）に着目した場合、「東アジア

アにおける交流」(外国との関わり)に着目した場合、「農業や商工業の発達」(産業の発展)に着目した場合の三つを想定してキーワードを設定した(資料7)。

事前に、教師側で視点に合わせた評価のキーワードを設定しておくことで、視点の異なる生徒のまとめも効率よく評価することができた。また、学習アプリを活用した毎時間(次)ごとのフィードバックにおいても、キーワードにつながる部分に線を引いて生徒に返却することで、生徒は「中世の日本」の大観のポイントを見失うことなく長い単元の学習に取り組むことができた。

- ①「武士の政治への進出と展開」に着目した場合
【キーワード】…天皇や貴族の政治との違い、主従(たて)の結び付き、武力、幕府の成立と推移、武士が好む鎌倉文化、禅宗
- ②「東アジアにおける交流」に着目した場合
【キーワード】…モンゴル帝国の貿易や交流、元寇が日本に与えた影響、日明貿易と貨幣経済の発達、琉球の国際的な役割
- ③「農業や商工業の発達」に着目した場合
【キーワード】…民衆の成長、民衆の成長を背景とした文化、自治的な仕組み、よこの結び付き、農業や手工業の発達

資料7 大単元の振り返りの評価のキーワード

7 成果と課題

- 前後の中項目のつながり(古代→中世→近世)を意識して単元や授業を構成することで、問題解決的な学習の過程となり、生徒の課題意識がつながった。生徒が様々な問いを持ち、他者と共有し、新たな問いを見出し、考察を繰り返して問いを深化させていく(=「問い」を紡ぐ)ことを通して、生徒が中世の日本に対する思考を広げ深めていくことができた。
- 小単元、大単元それぞれにおいて「何を学んだのか(認識の変化等)」「学び方はどうだったのか(学びの自己調整)」の視点から振り返りを行い、その内容を次時への学習や問いに反映させたことは、生徒の課題意識をつなぎ、主体的に学ぼうとする姿勢及び学習内容のより深い理解へとつながった。
- 授業で使用した資料や全ての学習シートが蓄積された学習アプリを活用したことは、自分が学んだことや学び方を個に応じて振り返ったり、単元を貫く問いの解決に向けた意見交換・情報共有を円滑に行ったりすることができ、生徒がより広く、より深く考え伝え合う姿につながった。
- ▲ 単元を通して、生徒の課題意識や思考の流れを継続させる(問いを紡ぐ)ためには、問いの質を高めることが大事であり、資料の精選や提示のタイミングなど問いの質を高めるための工夫が常に必要である。
- ▲ 単元の終末において、生徒が様々な視点から時代の大観を考察するため、より公正で効率的な評価方法について考えていく必要がある。